

2017年度外部評価結果

	舌間 久芳 先生		大村 哲夫 先生		佐藤 慎司 先生		山根 隆行 先生		下迫 健一郎 先生	
	指標	コメント	指標	コメント	指標	コメント	指標	コメント	指標	コメント
1.当該年度の目標設定について	S(秀)	当該年度の目標は十分に達成した。本業務の趣旨である沿岸防災プラットフォームの設計・運用、再現水槽、防災VRシステムの設置等を、学内の特設HPを通じて次年度以降の情報を共有するために全学に配信している。また、国際シンポジウムの開催も滞りなく実施し、万全のスタートを切ったと考えられる。	A+(優)	事業初年度に基本的なツールを整備することは評価できる。	A-(良)	初年度は施設や事務システムの基盤整備が重要であるため、これらを優先した目標設定は適切である。	S(秀)	事業初年度で、実働半年間の目標設定としては意欲的であり、事業への取り組みの熟識が伺われます。	A+(優)	目標の設定は明確である。
2.当該年度の実施計画について	S(秀)	4つのWGにおいてディスカッションや情報整理が行われており、効果的なブランディング事業としての戦略の共有が図られている。また、沿岸諸国や国内外の学識経験者を集めたキックオフシンポジウムにおいては、内外の各機関との情報共有が達成されており、今後の展開が大きく期待される。	A+(優)	4つのWGを設置し併行してデータベースと構築していることは合理的な実施計画と思慮	A-(良)	目標に応じた実施計画となっているが、計画の達成度評価の項目に、4つのWGの具体的な研究内容が反映されていないことや心配が残る。	S(秀)	4つのWGを設置するなど、大学の掲げられたビジョンを具体的に事業に反映された実施計画と見ます。	A+(優)	実施計画の内容が具体的に示されている。
3.当該年度の達成度合いについて ①沿岸防災プラットフォームにおけるシナリオ計算が1万ケース程度計算できたか。	A+(優)	プラットフォームの構築は、4つのWGにおいてそれぞれデータベースの構築が完了し、日本列島周辺に襲来した台風の属性値の出現分布を、モンテカルロシミュレーションを用い、台風モデルを計算し、浸水予測の実施が行われている。また、地震においては、地震のスケール則を求め、確立津波モデルに必要なシナリオ計算を1万ケース実施している。	A-(良)	初年度に1万ケースを超える試算を終了したとの報告があった。	B(可)	1,000ケースをすでに終了しており、年度内に1万ケースの計算が終了予定である。一方で、計算機で多数のケースを計算することは自体は極めて簡単なことなので、これのみにより、事業の進捗が進んだとは判断できない。	A+(優)	沿岸防災プラットフォームの構築とそれを用いてのシナリオ計算の実施は確認できたが、ケース1万件程度が終了できているかの確認が得られなかった。	B(可)	現段階では計算が継続中であり、最終的に1万ケース終了したことが確認できていない。
3.当該年度の達成度合いについて ②沿岸防災再現水槽及び沿岸防災VRシステムが設置および稼働できたかどうか。	S(秀)	沿岸防災再現水槽及び沿岸防災VRシステムの設置がされており、災害や環境による影響評価のためのVR可視化システムとしての「没入型VRシステム」は導入されており、稼働中である。	A+(優)	沿岸防災再現水槽及び沿岸防災VRシステムの設置及び稼働を確認した。	A+(優)	水槽とVRシステムの設置を確認した。また、実際に稼働していることを確認した。	S(秀)	3月27日に開催された沿岸防災再現水槽及び沿岸防災VRシステムの施設見学会において、施設の設置と稼働を確認しました。	A+(優)	沿岸防災再現水槽及び沿岸防災VRシステムが設置され、正常に稼働していることを確認した。
3.当該年度の達成度合いについて ③大学ホームページ内に特設ページを開設できたかどうか。	A+(優)	本事業の趣旨は、学長主導型であることが特徴であり、学長主導の下、学内に本プロジェクトの専用ページが特設されて既に情報発信を開始している。また、大学の中長期事業計画にも「地球規模での複雑な諸問題の解決に寄与し、専門的かつ学際的な研究の推進を図る」位置づけられている。	A+(優)	特設ページの開設を確認した。	A+(優)	大学HP内に特設ページが開設されている。	S(秀)	中央大学のホームページ内に私立大学研究ブランディング事業災害適応科学プラットフォーム開発プロジェクトのページを確認しました。	A+(優)	特設ホームページが開設されており、内容も充実している。
3.当該年度の達成度合いについて ④効果的な情報発信を行うための体制整備	S(秀)	大学広報室と直接支援を行う研究支援室が中心となって、大学HP内にプロジェクト専用の特設ページを開設した。また、プロジェクトのロゴマークを制作し、対外向けプロモーション動画の作成も行っている。有川委員長を始めとして、関係者により、メディア等に本件のニュースリリースが盛んに行われている。	A-(良)	朝日新聞デジタルに掲載された他各種発表を行っている。	A+(優)	研究支援室に加え、委員会および広報室との連携が構築され、効果的な情報発信を行うための体制が整備された。	S(秀)	ニュースリリースによって効果的な情報発信を行っておられることを確認しました。	A-(良)	情報発信の体制については確認できたが、具体的にどのような情報を発信しようとしているのかが分からないため、効果的に機能するかがやや不明確である。
3.当該年度の達成度合いについて ⑤沿岸防災プラットフォームに関するキックオフシンポジウムを開き、国内外10機関以上と本事業の主旨について共有が図れたかどうか。	S(秀)	キックオフシンポジウムには、国内外10機関、及び学識経験者が参加し、特に、沿岸国のチリからは、駐在チリ大使も出席し、見解を述べられた。参加者を含めた公開討論や意見の交換会等も行われ、防災再現水槽の建学やVRの体験を通じ、本事業の趣旨が十分に共有されたものと考えられる。	A+(優)	海外4機関からの発表を含め10機関以上の参加を得、充実したシンポジウムが実施できた。	S(秀)	国際シンポジウムが成功裡に開催され、本事業の主旨について共有が図られた。	S(秀)	3月27日開催のキックオフシンポジウムに出席し、参加者も含め国内外10機関以上と本事業の主旨について共有が図られていることを確認しました。	A+(優)	海外を含む研究者を招聘して国際シンポジウムを開催し、多くの参加者もあり本事業の主旨を広く認識させることができた。
4.総合評価	S(秀)	本支援業務の取り組みは、必須の要件であるビジョンとブランディング戦略を全学で共有し、文理融合で取り組んでいる。初年度に最終の出口を見据えた目標設定を行い、初年度として、実施計画の達成度は十分に評価に値する。次年度以降の展開、繋がりは、PDCAを繰り返すことにより、さらに意義深いプロジェクトになることが期待される。	S(秀)	事業初年度にほぼ計画通り実行したスタートが出来たと評価できる。	A+(優)	施設などの基盤整備と全学的に研究を支援する体制が構築され、国際シンポジウムの形で、今後の取り組みについて情報発信できた。	A+(優)	WG4の活動が他のWGの活動成果に比べて見えない点が少し気になります。	A+(優)	初年度に関して、おおむね順調に事業が進捗していると判断した。
評価コメント（自由記述）	本業務は、私立支援対象事業であり、文理融合の総合大学として、私大では唯一の学際的な取り組みを行い、同時に前年採択された「比較法文化プロジェクト」と併せ、重層化したプラットフォームの創出が十分に期待できる。 本業務を単なる研究教育拠点だけに止めず、産学官の連携拠点として革新的なプロアットフォームに深化させ、建学の精神である実学主義に則り、大学の強み、他大学との差別化を進め、私学振興補助事業に応えたいと考える。 本業務がインフラ整備等の国家プロジェクトの創出へとつながる事も十分に期待できる。年次の実施計画の中で喫緊の課題を取り入れ、改革されたプロジェクトをさらに深化させていきたい。 国際シンポジウムは、沿岸国並びに関係国から多くの学識経験者や有識者が出席され、特に、チリからは駐日大使が出席され、沿岸国としての知見を述べられた。 本プロジェクトを介して、学内にアントレプレナー教育や多くのビジネスモデルを駆使した企業の創出が可能となり、結果として、大学経営に大きく貢献するものと考えられる。		第1回評価委員会での報告、沿岸防災再現水槽の視察、災害適応科学プラットフォーム国際シンポジウムへの参加を通して研究初年度として順調なスタートを切ったと思慮します。豪雨、高潮、津波に対する浸水計算については最新の計算手法を用いて起こりうる現象を網羅しデータベース化するという精力的な作業を短時間で行ったことは評価できる。 避難行動についても現実の災害事例の分析から避難行動をモデル化しデータベース化したことは今後の研究の進展に大いに役立つものと思慮します。 国際シンポジウムでは津波研究の先駆者である首藤伸夫先生の長年の研究に裏打ちされた含蓄のある基調講演によりこの研究の基本方向が示された。また4人の海外からの研究者による発表からこの研究が海外の研究者との意見交換を通じ深められてゆくことを確信できた。 工学的見地から災害多発の日本列島での人の暮らし方について研究成果が深められることを期待したい。一方で其のを実現するため人々の生活とどう折り合いをつけてゆくか今後の大きな研究テーマである。このことは首藤先生の基調講演の中で憲法改正にまで言及されていたことにかがえる。法学の研究レベルも高い中央大学の総合力に期待したい。		WG 1～WG4間で、進捗状況や事業の取り組み状況などに差が大きい。災害適応科学プラットフォームの構築においては、結局のところ人間とのインターフェースが重要となるので、次年度以降においては、WGごとに目標を共有するとともに、WG間の連携を強化することが望まれる。		ニュースリリースとして紹介されている、有川先生と佐藤先生との対談「地震避難対策には、法整備が急務」という記事の内容は、今後の当ブランディング事業を進める上で貴重な示唆を含んでいると思います。 特にWG4の活動が核となる考えの様に思います。今後、WG4の研究チームに佐藤信行教授のご指導をいただくことも有益ではないかと思います。		研究ブランディング事業の初年度として、おおむね順調に進んでいると思います。特に、キックオフシンポジウムに関しては、国内外から研究者を招聘し、多数の参加者もあって大成功であったと思います。 シナリオ計算に関しては、今年度の最終的な実施状況まで確認できなかったため、次年度以降、多くの成果が得られるよう効果的な活用を期待します。 沿岸防災再現水槽及び沿岸防災VRシステムについては、今年度予定どおり整備されたので、次年度以降、多くの成果が得られるよう効果的な活用を期待します。 特設ホームページについては、今後も定期的に更新し、さらに内容を充実させていくことが重要だと思います。 情報発信については、体制の整備は示されていますが、具体的にどのスキームでどのような情報を発信するかを明確にして、効果的な情報発信を行う必要があると思います。 次年度以降の活動に期待しています。	